

仙台市文化財調査報告書第240集

原 遺 跡

—第3次発掘調査報告書—

1999年12月

仙台市教育委員会

原 遺 跡

—第3次発掘調査報告書—

1999年12月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

日頃より、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大の御協力を頂き、担当する仙台市教育委員会にとりまして、誠に感謝にたえません。

西多賀地区は古くからの住宅地の中で、多くの縁が残っていたところがありますが、近年は、隣接する仙台市南部の副都心と位置づけられる太白区長町・富沢地区の発展とともに、新しく生まれ変わりつつあるところであります。

この度の原遺跡の調査は平成9年度に統いて第3次調査として実施され、数々の貴重な成果が得られました。本報告書はその成果をまとめたものであります。

まもなく21世紀を迎えようとしている中で、先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私達に課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成11年12月

仙台市教育委員会

教育長 小松 弥生

本 文 目 次

序	
例言	
凡例	
I. 調査要項	1
II. 調査方法	1
III. 基本層序	2
IV. 検出された遺構と遺物	3
1. 古墳	4
2. 積穴遺構・堅穴住居跡	18
3. 土坑・溝跡	24
V.まとめ	25

例 言

- 本書は店舗建設に先立って行った原遺跡の第3次発掘調査の報告書である。
- 図面整理は佐藤洋が、出土遺物の整理は主浜光朗が担当し、本書の編集は主浜が行った。
尚、本文の執筆はIII及びIV-1・2・3を佐藤、主浜が、その他を主浜が行った。
- 遺跡の概要については、本遺跡の第1次・第2次発掘調査報告書と重複するため割愛する、そちらを参照していただきたい。
- 本調査における出土遺物、図面、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。
- 発掘調査、報告書作成にあたって次の方々のご指導、ご助言、ご協力を賜った。

勝村建設株式会社東北支店 藤沢 敦

凡 例

- 本書中の土色及び遺物の色調については「新版標準土色帖」(小山、竹原1997)を使用した。
- 本書の文章、実測図中の方位は真北で統一してある。
- 本書中の遺構略号は以下のとおりで、それぞれに通し№を付けた。この№は第1次・第2次調査からの通し№である。
S I : 壊穴遺構・堅穴住居跡 S K : 土坑 S D : 溝跡
- 本書中の遺物略号は以下のとおりに表している。
C : ロクロ不使用の土器 E : ロクロ使用の土器
D : 須恵器 N : 金属製品 P : 土製品
S : 墓輪
- 円筒埴輪、朝顔型埴輪の各部の名称は仙台市文化財調査報告書第108集『大野田古墳群 春日井古墳・鳥居塚古墳 発掘調査報告書』の記述に依った。

I. 調査要項

遺跡名 原遺跡（宮城県遺跡番号01083、仙台市

文化財登録番号 C-154）

所在地 仙台市太白区西多賀三丁目1番地

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査第2係

担当職員 佐藤 洋、主浜 光朗、

五十嵐 康洋、

調査期間 平成10年8月3日～同年10月6日

調査対象面積 約4,100m²（発掘面積：約1,600m²）

調査参加者 （野外調査）阿部 敬子、阿部八重子

板橋 栄子、板橋 静江、植野美登子

遠藤いな子、小川 良子、小野紀美子

神崎 是夢、菊地 恵子、菊地 緑二、小林 斎美、佐藤 清治、佐野たみえ、島崎なつ子

脇原 弘、鈴木きぬ子、高橋たづよ、早川 裕子、菱沼みのり、松野 順子、三浦たか子

三浦つよの、吉田 公治、渡辺 芳裕

（室内整理）相沢美佐子、石川カツ子、井上里映子、小林 由美、斎藤喜恵子、小泉 幸子

佐藤 洋子、佐藤 優子、高橋 弘子、千葉 朱実、森谷 愛子、若生 洋子、渡辺まさ子

申請者 株式会社コナカ

調査協力 勝村建設株式会社東北支店



第1図 調査区位置図 (1/20,000)

II. 調査方法

1. 調査区の設定

原遺跡は、平成8年9月20

日に提出された発掘届により、

宅地造成第一工区の範囲を平

成8年度に1次、9年度に2

次調査として発掘調査を実施

した。第一工区の南東に隣接

する第二工区については、2

次調査時に、遺構密度が希薄

であることが予想された東側

の谷部と南側の斜面下部に試

掘トレンチを設定して遺構の

分布範囲を確認した。その結

果、遺構の存在の認められな

かった範囲については、第二



第2図 調査区設定図

工区の調査範囲から除くこととした。この地域は2次調査終了後、第一工区を削平した際の土砂を盛り、暗渠排水の工事を終わっていた。

3次調査区は、2次調査区の南東に隣接して、暗渠工事の終了している部分より西側に設定した。2次調査終了後に行われた第一工区の造成工事のため、2次調査区とのあいだに北側で幅約4.5m、南西側で幅3~5mの調査できない地域が生じてしまった。また、暗渠工事の区域は図面上では、遺構の分布範囲の外側であったが、実際には後述するように、遺構にかかっている部分があった。

1・2次調査時の測量基準杭が既に消失しており、3次調査区では新たに測量基準杭を設定しなければならなかつた。調査区内に、国家座標を基準として10m×10mのグリッドを設定し、南北軸を北からアルファベット文字で表し、東西軸をアラビア数字で表して両者の組み合わせグリッド名を表すこととした。原点の平面直角座標系Xにおける座標はX=-197.710 km、Y=2.340 kmである。

2. 調査方法

重機によって盛土、旧表土を除去した後、人力で精査を行った。遺構検出面以下の層については、2次調査時に下層からの遺構、遺物の検出がなく、今回の3次調査で火山灰層にまで達している擾乱の壁面でも下層に遺構、遺物の存在の可能性を示す資料がみられなかつたため、下層調査は行わなかつた。

遺構の測量は、グリッドの交点に設けた基準点を利用した簡易造り方によって1/40の全体図及び、1/20の遺構平面図を作成し、土層断面図、エレベーション図は1/20の実測図を作成した。記録写真は35mmモノクロ、カラーリバーサルを用いた他、35mmカラープリントで随時作業状況の撮影を行なつた。

III. 基本層序

今回の調査区では、比較的擾乱や削平を免れた調査区北壁中央部(A-3区)で、SD-3の東側の土層を基準とした。

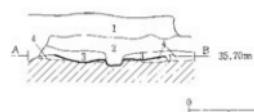
第1層 暗褐色～褐色のシルトブロック層。砂や礫を多量に含む。1次調査後の工事に伴う盛土層である。

第2層 10YR3/1 黒褐色シルト層。層厚約20cm。この層は盛土以前の表土であるが、東部や南部では削平されたためか確認されない。現代の畑の耕作土である。

第3層 10YR2/2 黒褐色シルト層。層厚7~14cm。この層は、調査区北壁中央部付近やSD-3の周辺で認められる。他の場所では削平されたためか確認されない。南西部ではこの層に変わって、2層の耕作による天地返しによって形成された層が厚く堆積している(第3図)。

第4層 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト層。火山灰層である。層厚は不明であるが、調査区のほぼ全面に分布している。今回の調査で検出された遺構はこの上面で確認されたものが大部分である。本層以下は無遺物層であると考えられる。

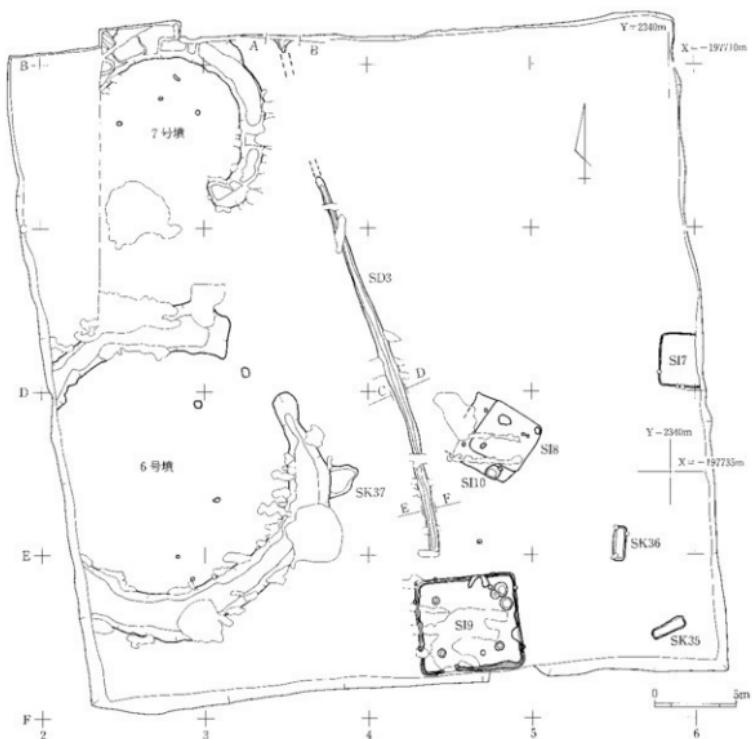
第5層 砂疊層。疊は円錐で、段丘堆積物または、泥流堆積物と予想している。周溝が途切れる6号墳北東部から7号墳の南部にかけて露出して見えている。一部の遺構はこの上面で確認されている。



層	名	土	性	層	名
基本層 1層	1	盛土		盛土	(1・2次調査後のもの)
基本層 2層	2	10YR3/1	黒褐色	調査区北側中央付近で供毛、磚、ヒニール罐等が混入、人骨が発見された供土?	
基本層 3層	3	10YR2/2	黒褐色	調査区北側中央付近で供毛。	
基本層 4層	4	10YR5/8	黄褐色	地二質シルト	上層は加瓦多い。

第3図 調査区北壁中央土層断面図 (SD-3部分)

これらの層の1・2次調査の基本層序との対応関係は、第1～3層が1・2次調査のI層に対応し、第4層がIII層に、第5層がIV層に対応するものと考えられ、1・2次調査で確認されたII層は、今回の調査区が斜面の下部に向かう部分であることと、畑の耕作で削平されたためか確認できなかった。



第4図 遺構配置図

IV. 検出された遺構と遺物

第1次・第2次調査（以下、前回の調査とする）で検出された遺構は、円墳10基、竪穴住居跡6軒、土坑34基（埴輪棺墓1基含む）、溝跡6条であった。今回の第3次調査では、円墳2基、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構1基、土坑3基、溝跡1条を検出した。このうち円墳2基と溝跡1条は前回の調査で検出された6号墳、7号墳、SD-3溝跡の延長部分である。各々の遺構は、基本層第2層耕作土の天地返しが溝状に走っているため、遺構検出面である第3層が著しく攢乱を受けており、遺存状況は良くない。出土遺物は円筒埴輪を中心に土師器、須恵器、鉄製品等整理用コンテナで約15箱である。

1. 古墳

6号墳（第5図～第6図・写真4～写真8）

概 要

調査区南西部C～E-2・3区、古墳群のなかでは1号墳とともに南端部の最も低い場所に位置している。SK-37土坑と重複関係にあり、SK-37土坑を切っていることから本遺構が新しい。また、上部が削平されているうえに、耕作による擾乱坑や倒木痕によって切られている。前回の調査の1号墳・2号墳と西側で接しており、特に2号墳に面する北西側の外側のラインは直線的になっていた。2次調査時に本遺構の西側1/4程度を調査しており両調査区の間の南北の一部を除いてほぼ全体を調査したことになる。確認面は基本層第4層上面であるが、北側の一部は第5層上面になっており、南側に傾斜し、その比高差は約50cmである。墳丘は既に失われており、主体部についても既に削平されているものと思われ、周溝のみを確認した。

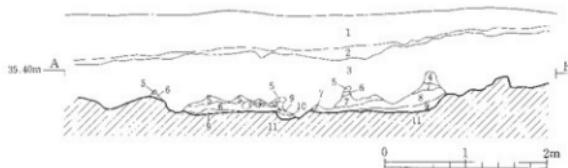
古墳の平面形は、北東側の一部が途切れているが、周溝内側の墳丘部が円形であり、円墳であると思われる。規模は墳丘部の直径約15.3m、周溝を含む外径が約19m～20.8mである。この規模は、本遺跡では第2次調査の11号墳に次ぐ2番目のものである。

周 溝

周溝は幅約1.7m～3mで北東部が狭くなっている。深さは最も残存状況の良い南側で36cmである。北側ほど浅くなっている。断面形は皿形で壁の立ち上がりは緩やかである。底面は基本層第4・第5層からなっており、小さな起伏が見られる。第5層を底面とする部分は特に浅くなり、北東部の周溝が途切れている部分については、前回の調査の報文に述べられているように、上部の削平により消失してしまった部分と思われる。周溝内の堆積土は自然堆積であり、堆積土中位に灰白色火山灰が小ブロック状に認められた。

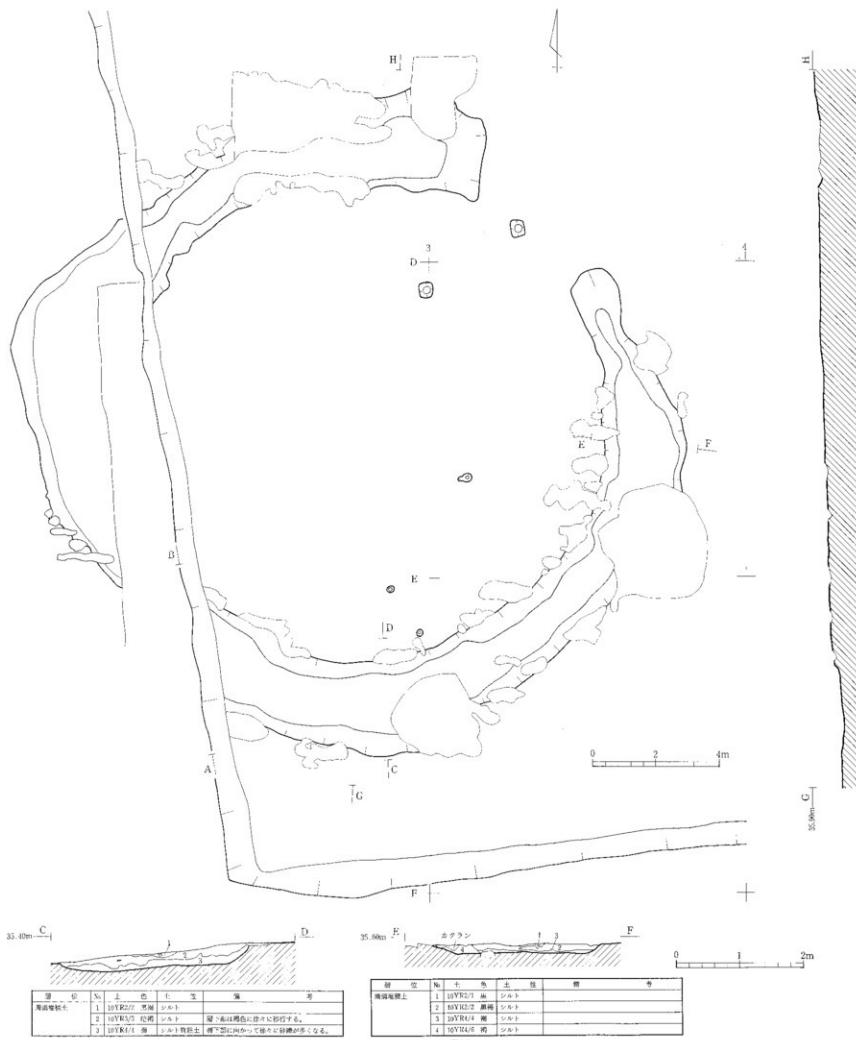
出土遺物

周溝堆積土から埴輪片が約2250点（約42.3kg）、剝片5点が出土した。2次調査時に西側部分から出土した遺物と合わせると埴輪約4120点（約73.3kg）、剝片9点が出土している。遺物の出土状況をみると、埴輪の出土は南側ほど多くなっており、東および、北側では少なくなっている。西側で遺物数の半数近くが出土していたことになる。また、南側の周溝を切る倒木痕から土製の勾玉が1点出土している。図示したものは28点で、このうち朝顔形埴輪が2点、円筒埴輪が25点で、土製勾玉 1点もここに掲げた。



所 在	地	じ	色	土 性	特
基木層第1層	1				第1次・2次調査後の遺土。
基木層第2層	2	10YR2/2	暗褐	シルト	
風化層第3層	3	10YR2/2	褐色	シルト	
6号墳周溝堆積土	4	10YR2/2	暗褐	シルト	
	5	10YR2/1	黒	シルト	風化物を少含む。
	6	7.5YR2/2	褐色	シルト	
	7	10YR2/4	暗褐	シルト	小礫を少含む。
	8	10YR2/3	褐色	シルト	
	9	10YR2/3	褐色	シルト	風化によりやや崩れ、ロームブロック多層に含む。
木砂築	10	10YR2/3	褐色	シルト	
基木層第4層	11	10YR2/0	黒	粘土質シルト	ローム層。

第5図 6号墳西側壁土層断面図



第6図 6号墳

埴輪（第7図～第12図・写真28～写真32）

出土埴輪について1次・2次調査報告書の基準（以下前回の基準とする）に則して分類する。

前回の調査で出土した埴輪は、円筒埴輪ではスカシ孔が半円形の3類と、調整技法から2か3類、5か6類と考えられるもの、朝顔形埴輪の可能性のあるものであり、細別分類のできるものは出土していない。

今回の調査では、円筒埴輪と前回の調査報告では可能性が指摘されていたのみの朝顔形埴輪が確認された。大部分が円筒埴輪で、朝顔形埴輪と判別できるものは少ないが、朝顔形埴輪の製作技法は基本的に円筒埴輪と同じであり、朝顔形埴輪と判別された点数以上に存在していたものと思われる。

朝顔形埴輪（第7図）

点数が少ないため1次、2次調査と同様に分類はできないが、肩部が張り、肩部外面に横方向のハケメが見られる。円筒部は3段であり、3段目の上側に寄った位置に半円形のスカシ孔、2段目の中央に横円形あるいは円形の小孔が90°ずらして配置されている。肩部にヘラ描き沈線が施されているものがある（2）。

円筒埴輪

円筒埴輪は全体の器形が判るものは少ないが、スカシ孔が半円形の3類のもの、器形及び調整技法から4類のものと5類のものがある。

3類

3a類、3b類と判別できるものは今回出土した埴輪のなかにはみられなかった。

3c類（第8図1～4）1はスカシ孔に欠けている部分があるが、整った半円形である可能性がある。内面調整は3段目のみ斜め方向のハケメが施され、以下は縦方向のナデである。前回の基準ではスカシ孔が整った半円形のものは3a類とされているが、内面調整が3c類のもので、スカシ孔に欠けている部分があり、判断としない点もあることからこの類とした。2～4は1と同様の調整であるが、スカシ孔がやや歪んだ半円形のものである。3段目の内面に斜め方向のヘラ描き沈線が施されるもの（2）、3段目が狭くなっているもの（3）がある。

4類

外面は1次調整タテハケのみであり、内面調整は斜め方向のハケメと縦方向のナデが施されているもの、縦方向のナデのみが施されているものがある。スカシ孔は円形で、いずれも口縁部内面に軽い設が付いている。内面調整に斜め方向のハケメが施されているものは前回の基準では4類にはみられないが、その他の特徴について前回の基準に照らしてこの類とした。

4a類と判別できるものは今回出土した埴輪のなかにはみられなかった。

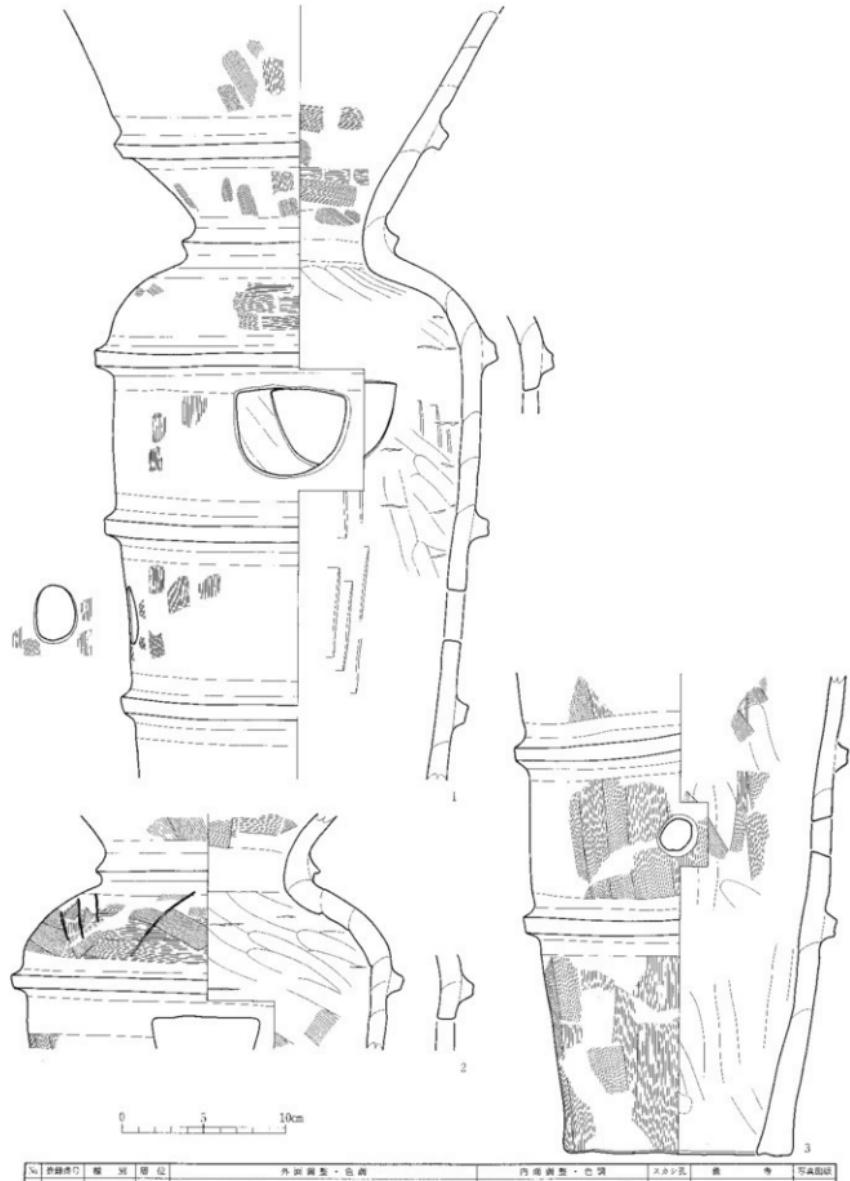
4b類（第9図1）器形は3段目がやや開き、内面調整は3段目のみ斜め方向のハケメで、以下は縦方向のナデが施されている。3段目の内面に斜め方向のヘラ描き沈線がみられる。

4c類（第9図2）基部が欠けているが、底径が小さくなるものであると考えられるためこの類とした。

その他細別分類できないものの中に、3段目の内面に斜め方向のヘラ描き沈線がみられるものがいくつか認められる。

5類（第11図3）

外面は1次調整タテハケのみで、内面調整は斜め方向のハケメとその後に縦方向のナデが施されている。スカシ孔は円形である。全体形は直線的に開き、口縁内部に軽い設が付いており、端部がわずかに窪む。基部が厚くなっている。内面に斜め方向のハケメが施されるものは前回の基準で5類としたものにはみられないが、その他の特徴について前回の基準に照らしてこの類とした。



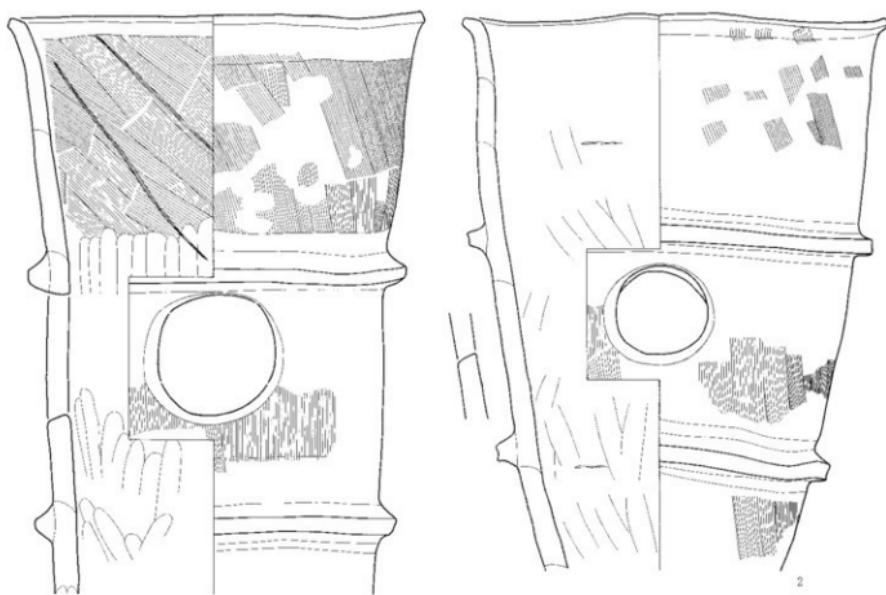
第7図 6号墳出土遺物(1)

No.	器種	形	施	外 観 構成・色 調	内 観 構成・色 調	スカラ孔	表	写真図
1	S-9	縦縫接埴輪	周 滅	頭部:タテハク、背部:ハメ(印・網) 円窓部:タテハク、凸部:コナメ	2.5YR4/6 円窓部:上部タテハク(網)、下部アブラン(網)	3孔 3YR5/6 円窓部:リコハグ、背部:ヘタナゲ	半円形	30-1
2	S-11	明鏡形埴輪	周 滅	延縫部:タテハク、背部:ハメ(印・網)、凸部:コナメ	7.5YR6/6 延縫部:リコハグ、背部:ヘタナゲ	3孔 3YR6/6 円窓部:ナデ・ハメ(網)	半円形	30-1
3	S-13	鉢形埴輪	周 滅	円窓部:タテハク、凸部:コナメ	7.5YR6/6 円窓部:ナデ・ハメ(網)	3孔 3YR6/6 円窓部:リコハグ	半円形	30-2

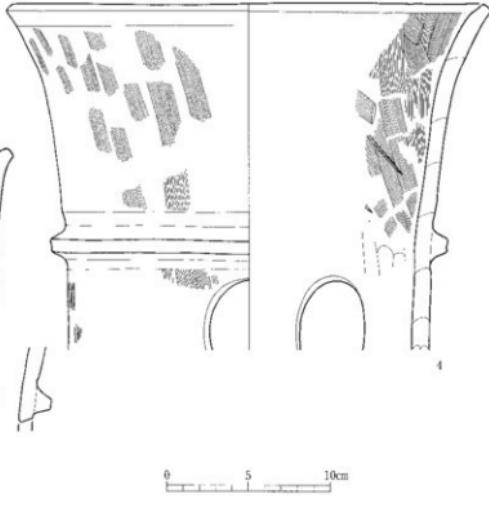


第8図 6号墳出土遺物(2)

No.	遺物番号	種別	原位	外因調査・色調	内因調査・色調	スカラ孔	参考	写真回数
1	S-12	円筒埴輪	同	黒(タカハ)、口縁部 リコナデ、凸部 リコナデ	SYR5/6 1.0の凹ハケメ(横・ナメ) ナゲ(暗)	SYR4/6 1.0の凹ハケメ(横・ナメ) ナゲ(暗)	半円形	30-2
2	S-5	円筒埴輪	同	黒(タカハ)、口縁部 リコナデ、凸部 リコナデ	2.5YR5/6 ハクメ(暗) ナゲ(暗)	2.5YR5/6 ハクメ(暗) ナゲ(暗)	半円形	30-4
3	S-3	円筒埴輪	同	黒(タカハ)、口縁部 リコナデ、凸部 リコナデ	SYR5/6 ハクメ(暗)	SYR6/4 ハクメ(暗)	半円形	30-3
4	S-6	円筒埴輪	同	黒(タカハ)、凸部 リコナデ	SYR5/6 ハクメ(暗) ナゲ(暗)	1.5YR5/6 ハクメ(暗) ナゲ(暗)	半円形	30-5



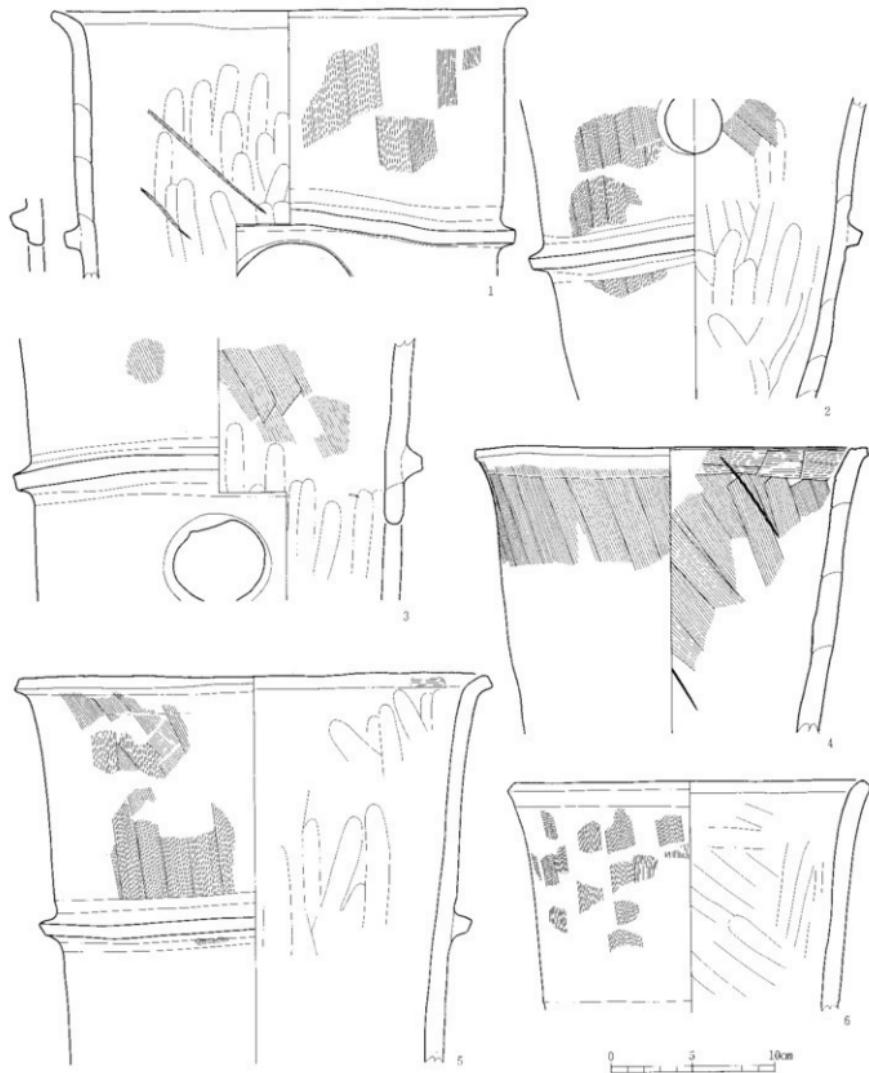
2



4

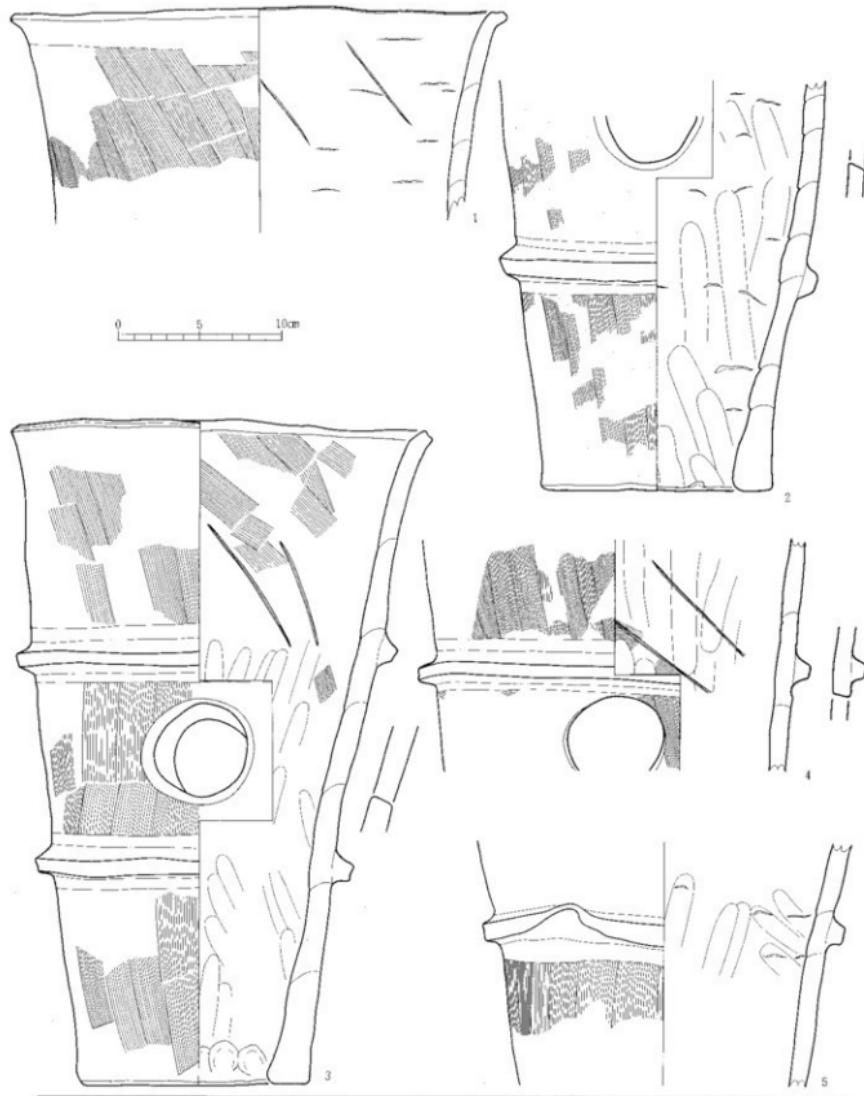
号	型设备号	種	別	規格	外 壁 装飾・色調		内面装飾・色調	スカラ孔	備	考	写真番號
					内面	外側					
1	5-2	内面織物	周	透	テテハラ、口縁部 リコナデ、両側 カロナデ	2.5VR5.8	ハメ(透) タテ(透)、口縁部 フコタデ	2.5VR5.6	円 形	4D 和	30-5
2	S-1	内面織物	周	透	テテハラ、口縁部 ココナデ、両側 リコナデ	3VR8.6	ナメ(透)	5.1VR5.6	円 形	4D 異	31-1
3	5-21	内面織物	周	透	テテハラ、口縁部 リコナデ、両側 カロナデ	5VR8.8	ナメ(透) 透赤(透)	7.5VR5.6	円 形	4 和	31-2
4	S-7	内面織物	周	透	テテハラ、口縁部 リコナデ、両側 カロナデ	7.5VR5.6	ハメ(透) タテ(透)、透赤(透)	7.5VR5.6	円 形	4 和	31-3

第9図 6号墳出土遺物 (3)



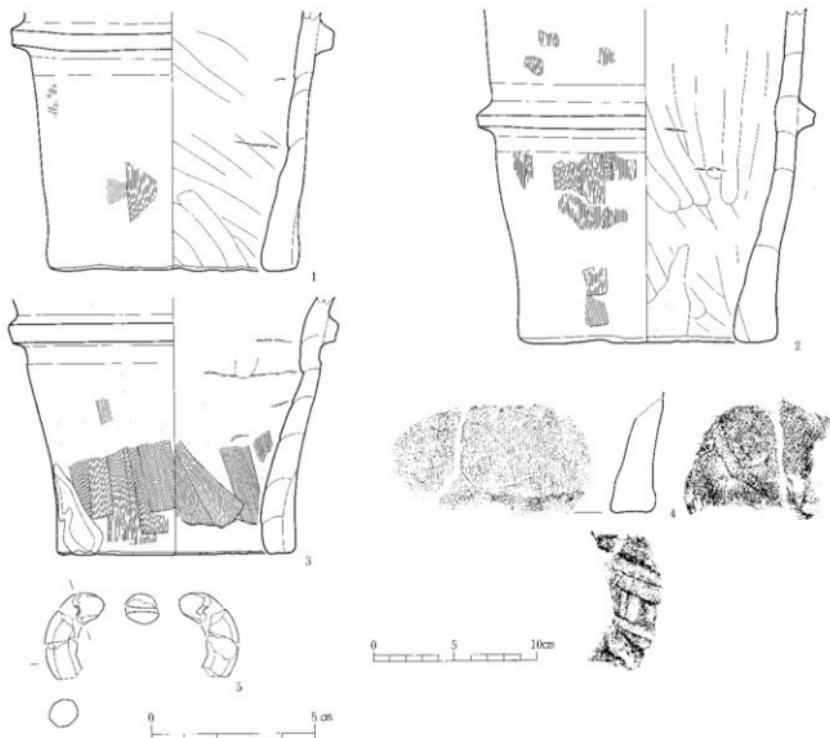
第10図 6号墳出土遺物(4)

No.	差缺番号	種	形	施	外 出 圖 横・色調	内 出 圖 横・色調	スカラ系	用	考	
1.	S-22	円筒埴輪	筒	素	テナカツ、口縁部 リコナフ、内壁 リコナフ	2.5YR6/8	ナゲ(固)、波線(固)	2.5YR7/8	内 壁	31-4
2.	S-23	円筒埴輪	筒	素	テナカツ、口縁部 リコナフ	2.5YR6/8	ナメ(固)、ナゲ(固)	2.5YR6/8	内 壁	4-N
3.	S-27	円筒埴輪	筒	素	ハラメ(固)、内壁 リコナフ	2.5YR6/8	ナメ(固)、ナゲ(固)	2.5YR6/8	内 壁	31-5
4.	S-28	円筒埴輪	筒	素	ハラメ(固)、口縁部 リコナフ	2.5YR6/8	ナメ(固)、口縁部 ハラメ(固)	2.5YR6/8	内 壁	31-6
5.	S-24	円筒埴輪	筒	素	ハラメ(固)、口縁部 リコナフ、口部 リコナフ	2.5YR6/8	ナゲ(固)、口縁部 ハラメ(固)	2.5YR6/8	内 壁	31-7
6.	S-25	円筒埴輪	筒	素	テナカツ、リコナフ、口縁部 リコナフ	2.5YR6/8	ナゲ(固)、口縁部 リコナフ	2.5YR6/8	内 壁	31-8



No.	器種名	概 様	置 位	外 形 説 明・色 説	内 口 溝 構 成 名 説	スカラ 化	寸 法
1	S-19	円筒埴輪	陶 滲	テテハケ。口周部 ロコナデ	3.VR5/0 勝底・伏締(斜)	3.VR5/8	32-1
2	S-20	円筒埴輪	陶 滲	テテハケ、凸部 ロコナデ	3.VR5/0 プラ(底)	3.VR5/8 内部?	底面横状压痕
3	S-8	円筒埴輪	陶 滲	テテハケ、口周部 ロコナデ、凸部 ロコナデ	2.VR5/0 ハメ(斜) テテ(底) 直締(斜) 斜面底	2.VR5/6 内 形	底面横状压痕 3點
4	S-13	円筒埴輪	陶 滲	テテハケ、凸部 ロコナデ	3.VR4/0 テテ(底) ハメ(斜) 伏締(斜)	3.VR5/6 内 形	32-3
5	S-14	円筒埴輪	陶 滲	テテハケ、凸部 ロコナデ	3.VR5/0 テテ(底)	7.VR5/4	

第11図 6号墳出土遺物 (5)



第12図 6号墳出土遺物 (6)

7号墳 (第13図・写真9～写真13)

概要

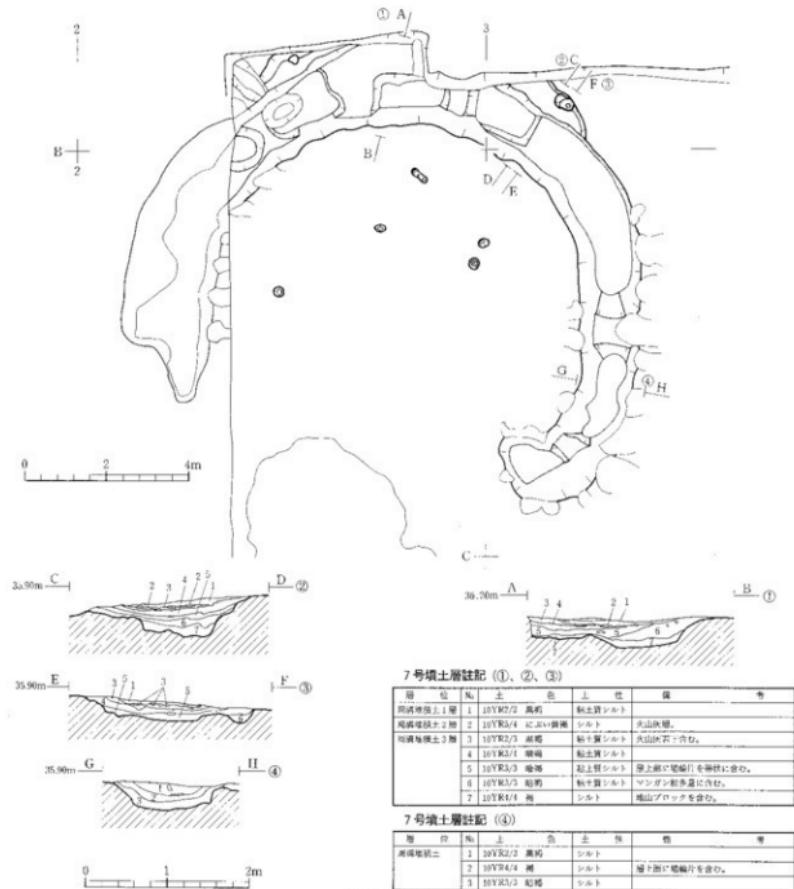
調査区北西部 A～C-2・3区に位置し、調査区内では他の遺構との重複関係はない。また、上部が削平されているうえに、耕作による擾乱坑によって切られ、墳丘部や周溝の切れる部分には倒木痕がみられる前回の調査時の2号墳と接しているが本遺構の周溝が途切れており、直接の関係は不明である。6号墳同様2次調査時に本遺構の西側部分を調査しており、両調査区の間の北側の一帯を除いてほぼ全体を調査したことになる。確認面は基本層第4層上面であるが、南側の一部は第5層上面になっており、南東側に傾斜し、その比高差は約25cmである。墳丘は既に失われており、主体部についても既に削平されているものと思われ、周溝のみを確認した。

古墳の平面形は、南側が途切れているが周溝内側の墳丘部が円形であると考えられ、円墳であると思われる。規

模は、残存部から推定すると、墳丘部の直径約9.2m、周溝を含む外径が約12.4m程であると思われる。この規模は、本遺跡でこれまでに発見された円墳の中では最も小さい。

周溝

周溝は幅約1.28m~1.8mで東側がやや狭くなっている。深さは31cm~53cmで、北西部が最も残存状況の良い部分である。北側には調査区外へ広がる幅2.5m前後と考えられる張り出し部があり、この部分の深さは10cm~20cmと周溝より浅くなっている。周溝の断面形は浅い「U」字形を呈している。周溝底面は基本層第4・第5層からなっており、平坦ではなく、土壇状の凹部や土橋状の高まりがあり、起伏に富んでいる。これらの起伏の、成因として周溝掘削時の作業単位を示している可能性が考えられる。また、南側の周溝が途切れている部分は、6号墳と同様に、上部の削平により消失してしまった部分であると思われる。周溝内の堆積土は3層に大別され、自然堆積であり、中位に灰白色火山灰が認められた。



第13図 7号墳

出土遺物（第14図～第16図・写真33～写真36）

周溝堆積土から埴輪片が約3600点（約38.4kg）、土師器片4点、剝片2点、鉄釘と考えられる破片が1点出土している。前回の調査時に西側部分から出土した遺物と合わせると、埴輪片約3800点（約42.4kg）、土師器片4点、剝片2点、鉄釘と考えられる破片2点が出土している。遺物の出土状況に偏在性は認められなかった。その他に周溝北東部から板状の石片が集中して出土した。図示したものは20点で、このうち朝顔形埴輪1点、円筒埴輪19点、土師器の高杯脚部1点である。

埴 輪

6号墳同様に前回の基準に則して分類する。

第1次・2次調査で出土した埴輪は円筒埴輪のみで、5類に分類されたもののみであり、その他のものは確認されていない。

今回の調査では円筒埴輪と、前回の調査では確認されなかった朝顔形埴輪が確認された。大部分が円筒埴輪であり、朝顔形埴輪と判別できるものは少ない。6号墳同様に判別された点数以上に朝顔形埴輪が存在していたものと思われる。

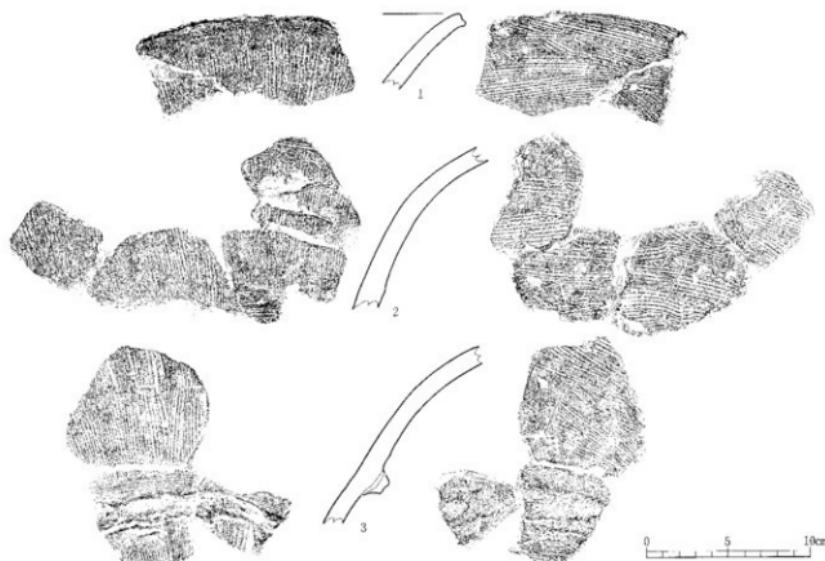
朝顔形埴輪（第14図1～3、第15図1～4）

図示したものは肩部から口縁部にかけての破片で、同一個体であると考えられるものである。肩部の張りは小さく、外面はタテハケのみで、内面は脛曲部以上がハケメで、以下は縱方向のナデである。円筒部は不明である。

円筒埴輪

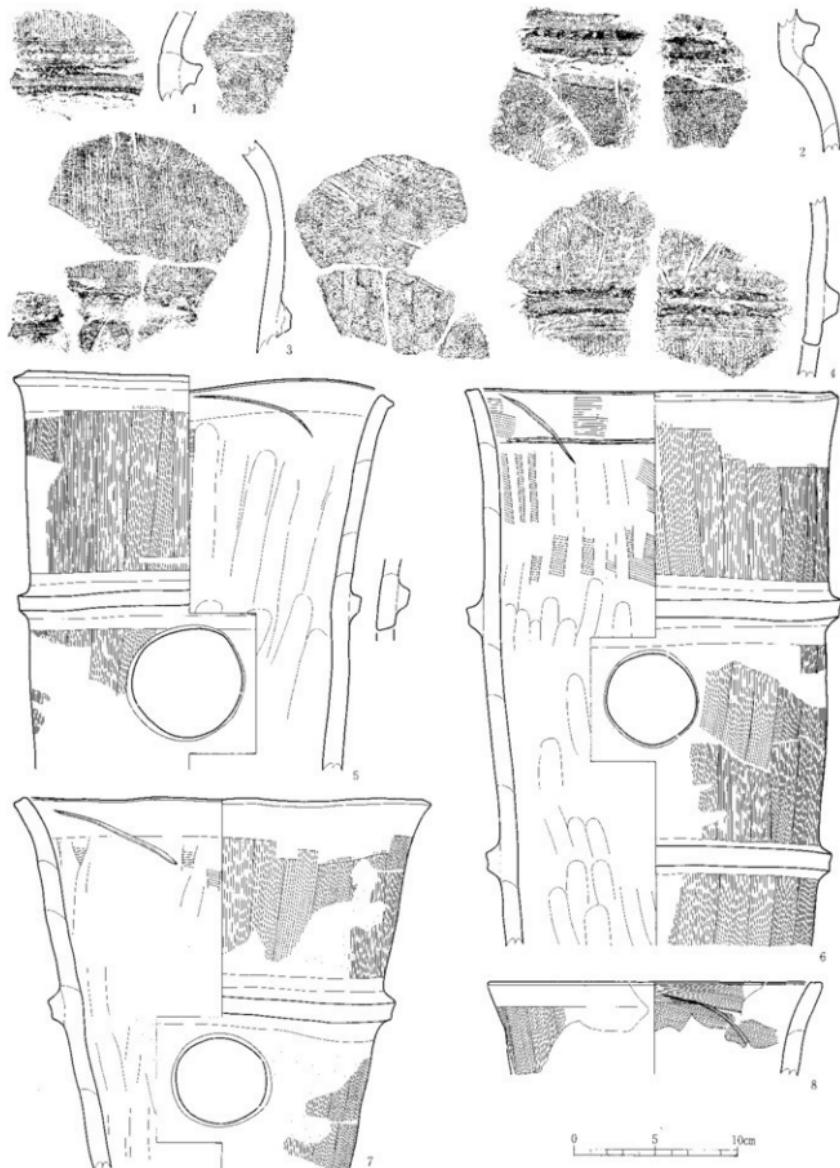
5類（第15図5～7、第16図1）

全体の器形が復元できるものは無いが、外面が1次調整タテハケのみで、内面は3段目のみに斜めあるいは横方



%	生年	埋 現	局 位	外 面 構 造・色 言	内 面 構 造・色 言	スカラ系	標 号	写 真
1	5-27			（近縁部）ココナフ、近内面 タテハケ	7.5YR6/6 ハケメ（横）	7.5YR7/4		34-1
2	5-31	施加耕耙	周 溝	タテハケ、ヨリナギ	7.5YR6/6 ハケメ（横）	7.5YR7/4		34-2
3	8-29			近内面 タテハケ、近縁 ココナフ	7.5YR6/6 近縁部 ハケメ（横）、内面底 ナデ（横）	7.5YR7/4		34-3

第14図 7号墳出土遺物（1）



No.	登録番号	種類	性質	外観調査・色調	内面調査・色調	スカリ孔	断面図
1	S-32	粘土質陶器	周溝	20mm タイハク、凸唇 コロナデ	7.5VR6/6 ハク(糊) ナゲ(糊)	7.5VR6/6	
2	S-36	粘土質陶器	周溝	9mm タイハク、凸唇 コロナデ	7.5VR6/6 ナゲ(糊)	7.5VR6/6	円一管体
3	S-41	粘土質陶器	周溝	7mm タイハク、凸唇 コロナデ	7.5VR6/6 ナゲ(糊・糊)	7.5VR6/6	55-2
4	S-33	リ西脚 タイハク、凸唇 コロナデ			7.5VR6/6 ナゲ(糊)	7.5VR6/6	
5	S-42	円筒埴輪	突起	クラハク、口縁部 コロナデ、凸唇 コロナデ	10VR7/6 ナゲ(糊)・糊 ハク(糊) 21mm	10VR7/6 円形	5壁 35-3
6	S-38	円筒埴輪	突起	クラハク、口縁部 コロナデ、凸唇 コロナデ	7.5VR6/6 ハメ(糊) ナゲ(糊) 18mm	7.5VR6/6 円形	5壁 35-4
7	S-40	円筒埴輪	凸唇	クラハク、口縁部 コロナデ、凸唇 コロナデ	7.5VR6/6 ハケ(糊) ナゲ(糊・糊)	7.5VR6/6 内形	5壁 36-1
8	S-39	円筒埴輪	突起	クラハク、口縁部 コロナデ	21VR6/6 ハケ(糊) 疾患	5VR6/6	

第15図 7号墳出土遺物 (2)



No.	登錄番号	種別	量	外観調査・色調	内面調査・色調	穴孔	性	参考文献
1.	S-35	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ・白茶・ココナチ	10YR8/1 ナチュラル	10YR8/6	円形	5個 36-2
2.	S-38	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ・白茶・ココナチ	5YR8/6 ナチュラル	5YR8/6	円形	
3.	S-44	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ・白茶・ココナチ	5YR8/6 ナチュラル	5YR8/6	円形	
4.	S-34	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ・白茶・ココナチ	7.5YR8/6 ナチュラル	7.5YR8/6	円形	6個 36-3
5.	S-27	円筒埴輪	底面	チャハラ・白茶・ココナチ	7.5YR8/6 ナチュラル	7.5YR8/6 ナチュラル	六角形	(複数)
6.	S-30	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ・白茶・ココナチ	7.5YR8/6 ナチュラル	7.5YR8/6 ナチュラル		
7.	S-45	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ	7.5YR8/6 ナチュラル	7.5YR8/6 ナチュラル		断面焼付灰陶
8.	S-43	円筒埴輪	周	赤茶・チャハラ	5YR8/6 ナチュラル	5YR8/6 ナチュラル		圓筒形灰陶
9.	C-12	素朴	2	赤茶	5YR8/6	7.5YR8/6		圓筒形灰陶

第16図 7号出土遺物(3)

向のハケメが施された後に縦方向のナデが施されるもの、縦方向のナデのみが施されるものがある。スカシ孔は円形である。内面にハケメが施されているものは、前回の基準にはないがその他の特徴からこの類とした。口縁部内面に弧状の短いヘラ掘き沈線が見られるものがある（1～3、5）。

6 種（第16図4）

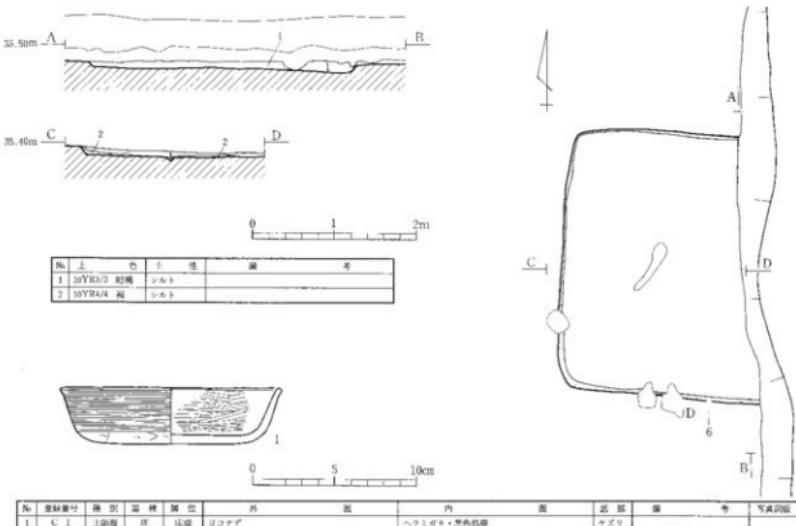
3段目が欠けているが、外面調整が1次タテハケのみで、内面が縦方向のナデでスカシ孔は円形である。3段目の下部以下の器形がごくわずかに内湾している。

2. 壺穴遺構・壺穴住居跡

SI-7 壺穴遺構（第17図・写真14）

調査区東端部C-5・6区に位置し、基本層第4層上面で確認された。第2次調査時の試掘によって確認されたものであるが、その後の工事によって、遺構の東半部の上部に暗渠が設置され、調査区の範囲が限られてしまたため、今回の調査では遺構の西半部しか検出することが出来なかった。検出された部分では、他の遺構との重複はないが南側で倒木痕と重複し、これを切っている。遺構の全体を検出できなかつたので、正確な平面形、規模は不明であるが、西辺2.98m、南辺2.4m以上の方形を基調とした平面形を呈するものと思われる。方向は西辺でN-3°-Eである。堆積土は2層に分けられる。壁高はもともと保存の良い南壁で11cmである。底面から急角度で立ち上がる。底面は基本層第4層からなり、平坦であるが南側に向かって若干傾斜している。また、南側で倒木痕を切っていることから、不明瞭な部分もあった。遺構内部では、周溝・柱穴・炉・カマド等の施設は検出できなかつた。試掘時にもカマド等の施設を思わせる焼土の分布などは見られなかつた。これらの特徴から、壺穴住居跡ではなく壺穴遺構として扱うこととした。

出土遺物は極めて少なく、堆積土中及び床面から土師器片、礫が出土している。図示したものは土師器壺1点のみである。この壺は成形の際にロクロを使用していないもので、内面に黒色処理が施されている。



第17図 SI-7 壺穴住居跡・出土遺物

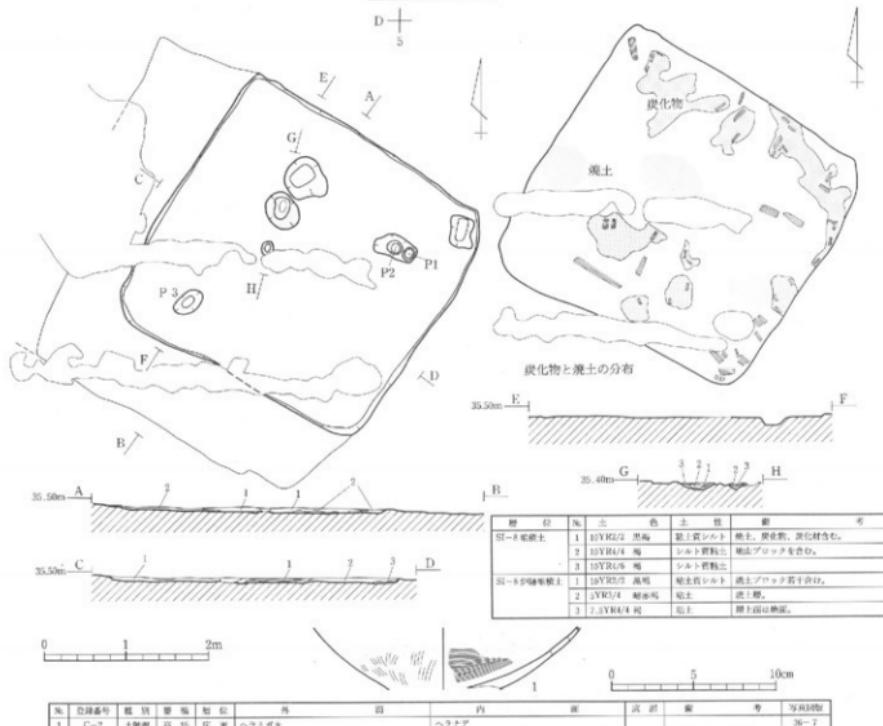
SI-8 穫穴住居跡（第18図・写真15～写真16、写真36）

調査区中央やや南東寄りD-4・5区に位置し、基本層第4層上面で確認された。SI-10住居跡と重複関係にあり、SI-10住居跡を切っていることから本住居跡のほうが新しい。上部は削平され、耕作による擾乱もあり残存状況は非常に悪い。平面形、規模は不整な方形を呈し、北西辺で3.21m、北東辺で3.14mである。方向は西辺でN-30°Eである。堆積土は3層に分けられ、焼土、炭化物を多量に含んでいる。壁は南及び西コーナー付近で僅かに高さ4cmのみ残存する。大部分床面から急角度で立ち上がるが、緩やかに立ち上がる部分も見られる。基本層第4層を直接床面としている。床面はほぼ平坦であるが、南側に向かって緩やかに傾斜している。周溝は検出されなかつた。床面上でピットを4個検出したが、No.1～3は何れも深さ10cm未満と浅く、柱穴であるか判断が難しい。また、P4は後述するように、本住居跡に切られているSI-10住居跡の柱穴と考えられる。床面中央部のやや北西寄りで47cm×40cmの楕円形を呈する炉が検出された。また、炉の南側に直径15cm程の小さな焼け面、北側に性格不明の直径約55cm、深さ約5cmの不整な円形を呈する凹み（土坑？）が検出された。更に東コーナー部分には40cm×30cm、深さ約5cmの不整な長方形を呈する浅い土坑が検出され、炭化材片が多数見られた。なお本住居跡は火災による焼失住居で焼土、炭化材が多量に検出されている（第18図）。炭化材の多くは、壁寄りに分布しており垂木材である可能性がある。

出土遺物は極めて少なく、床面及びピットから土器器片が出土している。図示したものは土器器高杯の環部と考えられるもの1点のみである。

SI-8 床面検出ピット(cm)

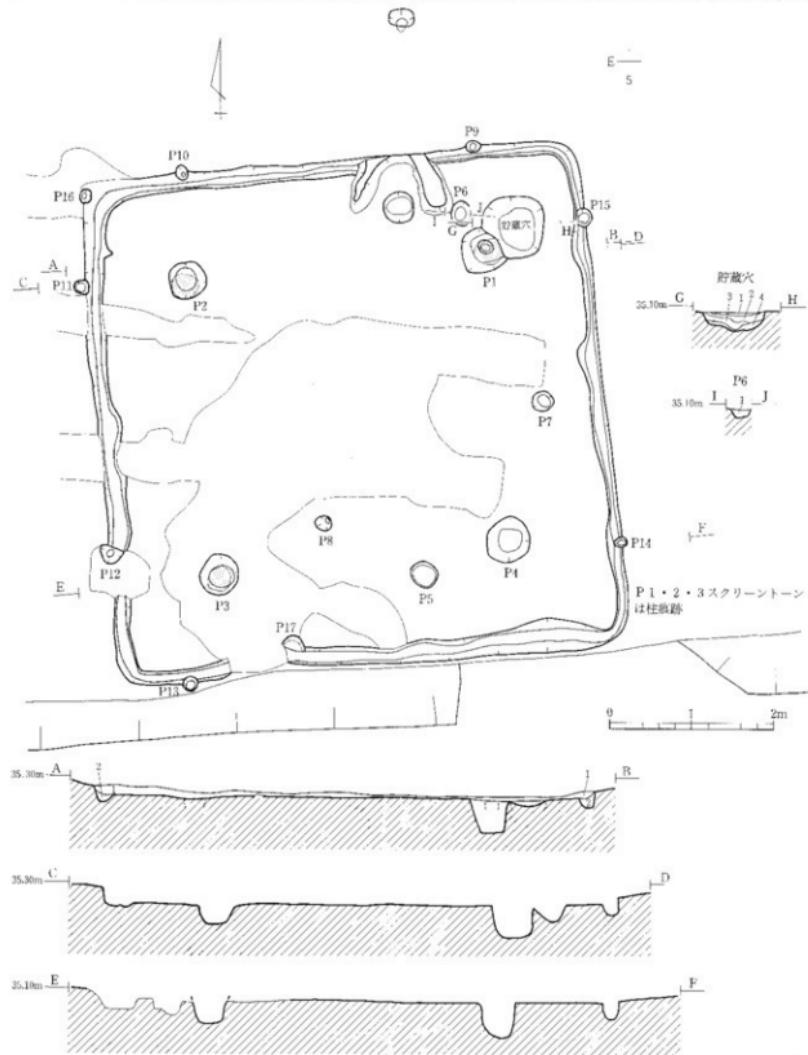
%	F-1	F-2	F-3
深さ	10.0	9.5	10.0



第18図 SI-8 住居跡・出土遺物

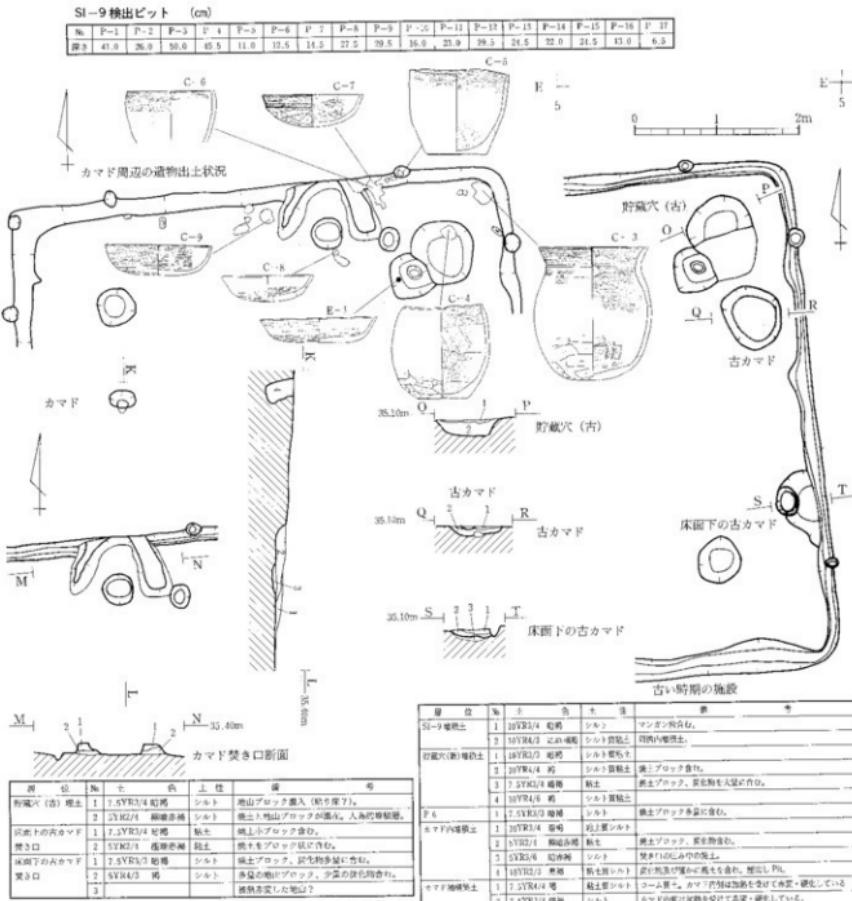
SI-9 壁穴住居跡 (第19図～21図・写真18～写真22、写真37～写真39)

調査区南端部 E-4 区に位置し、基本層第4層上面で確認された。他の遺構との重複関係はない。上部は削平され、住居跡中央を中心に天地返し等による擾乱を受けている。規模、平面形は北辺5.92m、東辺6.05m の整形な方形を呈している。方向は東辺で N-6°-W である。堆積土は2層に分けられる。壁高は、残存状況の良い北西コーナー付近で19.5cmである。基本層第4層を直接床面としているが、造り替えられた古い施設の埋土上部及び周辺部に貼



第19図 SI-9 壁穴住居跡(1)

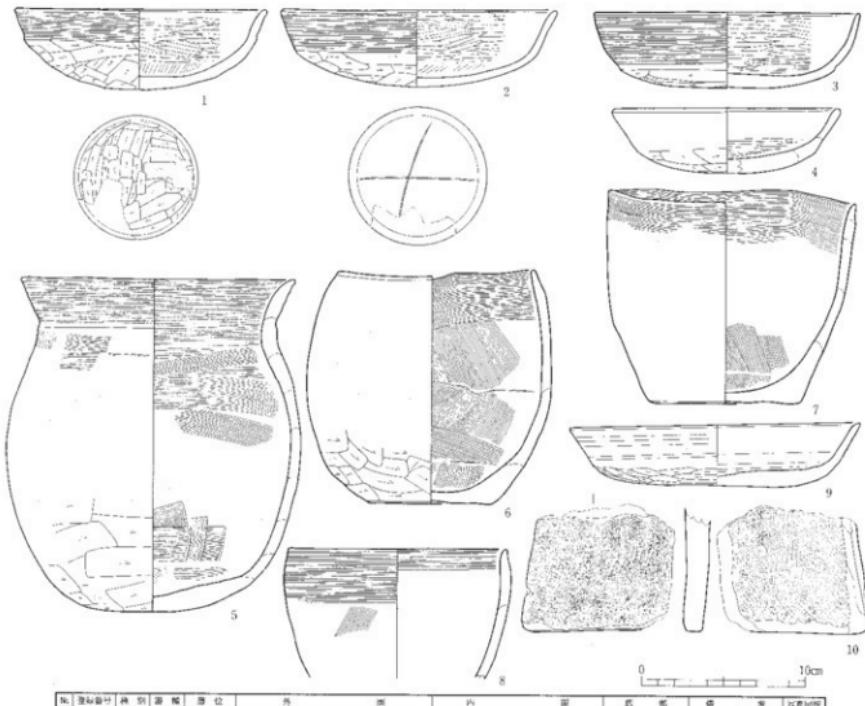
り床を施している部分が見られる。床面は平坦であるが、南側に緩やかに傾斜している。10cm前後の比高差が見られる。周溝は壁沿いに全周する。幅は12cm～30cmで、古いカマドの部分は幅が狭くなっている。床面からの深さは3.5cm～12.5cmあり、東廻、西廻の中央部付近が最も深くなっている。ピットは13個検出された。このうち、P 1～P 4は住居跡の対角線上にあり、主柱穴であると考えられる。いずれも比較的大きな掘り方を伴っている。P 1のみに柱痕跡が認められた。P 5には焼上ブロックや土器片が入っていた。P 6はカマド右袖脇にあり、焼土が充満していた。P 7～P13は壁柱穴と考えられ、住居跡各辺に主柱穴に対応するように2ヶ所づつ検出されているが、南壁は西側の1ヶ所のみであり、計7ヶ所になる。カマドは北壁やや東寄りに位置し、上部を削平されていることにより、残存状況は良くない。燃焼部は奥行き0.75m、幅0.9mで焚き口部に直径45cmの凹みがみられる。燃焼部右側の壁面は火熱のため焼けて赤変している。左壁は壁面が崩れて残ってはいないが内部は赤変している。煙道部は残存しないが、煙出しと考えられる、炭化物と焼土を含むピットを奥壁から1.55mの位置で検出した。また、東壁際で古いカマドの燃焼部と思われる部分を2ヶ所検出した。北側のものは80cm×60cmの横円形で深さ14.5cm、南側のものは



第20図 SI-9 穴住居跡 (2)

100cm×50cmの半円形で深さは10cmで周溝まで広がっており、焚き口と思われる部分に35cm×27cmの楕円形の焼土の詰まった浅いピット状の凹みがある。何れも地山と見られる黄褐色系の土によって埋め立てられていた（第20図）。北側の燃焼部はかなり大きいことから、カマド自体も大型だった可能性が強い。逆に南側のものは規模が小さい。カマドの東側には貯蔵穴と考えられる78cm×75cmの不整な楕円形の土坑が検出された。P 1と重複している。深さは23cmで、多量の焼土が含まれていた。この土坑に切られた直径約80cm、深さ23cmの土坑が検出された。古い貯蔵穴と考えられ、地山と見られる黄褐色系の土によって埋め立てられ、内部には焼土が含まれていた。古い貯蔵穴は東壁側の古いカマドに対応するものと考えられる。

出土遺物は、カマド周辺に集中し、土器の他に成形したと思われる粘土塊の焼けたものの破片や川原石も目についた（第20図）。P 1とした主柱穴の掘り方検出面（床面）に須恵器坏が出土したほか、P 4の南側埋土中からは瓦が出土した。図示したものは土師器坏4点、甕4点、須恵器坏1点、瓦1点である。土師器はいずれも成形の際にロクロを使用していないものである。瓦は丸瓦で凹面に布目、凸面になでが見られる。



No.	埋蔵番号	種別	基盤	層位	外観	内観	底板	底板	底板	参考文献
1	C-10	上向型 甕	床	P-1	ミコナデ 体側へ凹部へハケズリ	ミコナデへカニギヤ・黒色粘土	丸版			38-1
2	C-7	下向型 甕	床	P-1	ココナデ 体側へ凹部へハケズリ	ヘラミガキ・ぬれ泥				38-2
3	C-9	三脚型 甕	床	P-1	ミコナデ	ヘラミガキ・黒色粘土	ハラズリ			38-3
4	C-8	火鉢型 甕	床	P-1	ハラズリ	ハラズリ	ハラズリ	ハラズリ	ハラズリ	38-4
5	C-3	下向型 甕	床	P-1	ミコナデ 体側へ凹部へハラズリ	ミコナデ 体側へ凹部へハラズリ	口縁部 ミヅク	口縁部 ミヅク	口縁部 ミヅク	39-1
6	C-4	上向型 甕	床	P-1	ミコナデ(高)	口縁部へ凹部へハラズリ	ミコナデ 体側へ凹部へハラズリ	ミコナデ 体側へ凹部へハラズリ	ミコナデ 体側へ凹部へハラズリ	39-2
7	C-5	上向型 甕	床	P-1	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	39-3
8	C-6	下向型 甕	床	P-1	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	39-4
9	K-1	須恵器 坏	P-1	P-1	ロクロ 四面・砂利下端手持へハラズリ	ロクロ 四面・砂利下端手持へハラズリ	手持へハラズリ	手持へハラズリ	手持へハラズリ	38-5
10	F-1	丸 瓦	床	P-4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	

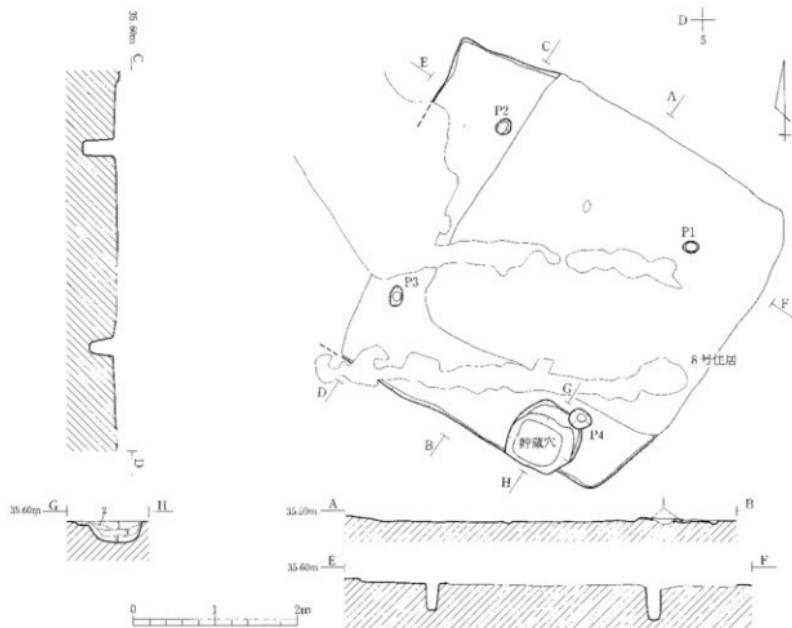
第21図 SI-9 穹穴住居跡出土遺物

SI-10 穫穴住居跡 (第22図・写真15、写真17)

調査区中央や南東寄り D-4・5 区に位置し、基本層第4層上面で確認された。SI-8 住居跡と重複しており、SI-8 住居跡に切られていることから本住居跡の方が古い。また、倒木痕や烟の耕作痕によって擾乱を受け、さらに削平も著しい。重複や擾乱、プランが明確でないところもあり、正確な規模、平面形は不明であるが、一辺約4m 前後の方形を基調とした平面形を呈する。方向は南西辺で W-30°-N である。堆積土は単層であり、多量の炭化物を含んでいる。壁高は僅かに 2~3cm 残存しているにすぎない。床面から緩やかな角度で立ち上がる部分が多い。床面は基本層第4層から成り、平坦であるが南側に向かって緩やかに傾斜している。周溝は検出されなかった。ピットは3個(No.4~7)検出され、深さは30~43cmあり、いずれも主柱穴と考えられる。また、SI-8 住居跡の P4 は深さが43cmあり、位置的にも住居跡の対角線上にあり、本住居跡の主柱穴であると思われる。ガヤカマドは検出されなかった。また、南西壁の南コーナー寄りに90cm×80cmの楕円形で、浅い部分もあるが、深さ27cm程の土坑が検出され、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は極めて少量であるが、貯蔵穴を中心に土師器や弥生土器の細片、砾石器の破片が出土している。何れも図示できるものはないが、土師器は成形の際にロクロを使用していないものである。

SI-10 検出ピット (cm)				
No.	P-1	P-2	P-3	P-4
PI	32.0	32.0	30.0	40.6



層	位	土	性	備
SI-10前底穴	1	10YR1/3 黄褐色	シルト質土上に、黄褐色円柱体が存在。	
壁	2	5YR1/2 黄褐色	シルト質土上に、黄褐色ブロック多量に存在。	
	3	7.5YR3/3 黄褐色	粘土質シルト 土上部N1.2mまでシルト質、地下部N1.2mまで。	
	4	7.5YR2/3 黄褐色	均上 支離物質、粘土小ブロック僅かに存在。	

層	位	土	性	備
SI-10地盤	1	10YR1/3 黄褐色	シルト	多量の炭化物存在。

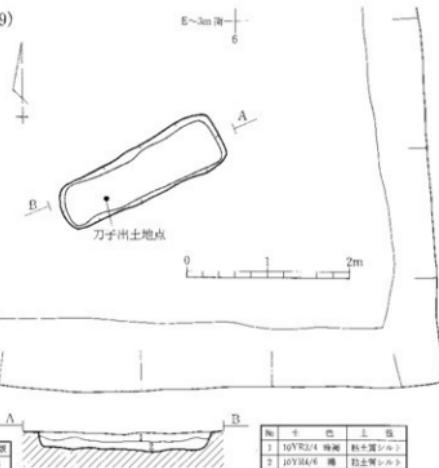
第22図 SI-10 穫穴住居跡

3. 土坑・溝跡

SK-35 土坑(第23図・写真23~写真24、写真39)

調査区南東隅E-5区に位置し、基本層第4層

上面で確認された。他の遺構との重複はない。平面形は長方形で、規模は長軸2.12m、単軸0.73m、長軸方向はN-64°-Eである。上部は削平を受け、浅くなっているものと考えられるが、深さは27cmである。埋土は2層に分けられるが、人為的な堆積土と思われる。壁は底面から急角度で立ち上がっている。底面は小さい凸凹はあるが、ほぼ平坦である。遺物は西側埋土中より刀子と思われる鉄製品が出土している。



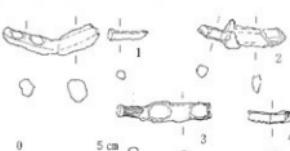
第23図 SK-35 土坑・出土遺物

SK-36 土坑 (第24図・写真25~写真26、写真39)

調査区南東寄りD-E-5区に位置し、基本層第4層上面で確認された。他の遺構との重複はないが、3ヶ所で擾乱を受けている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.14

m、単軸0.77m、長軸方向はN-2°-Eである。上部は削平を受け、浅くなっているものと考えられるが、深さは21cmである。

埋土は2層に分けられるが、人為的な堆積土と思われる。底面はほぼ平坦である。



No.	遺物番号	種別	層位	実測値 cm	幅 cm	厚さ cm	面積(cm ²)	写真記録
1	N-2	釘	1層	(39.0)	10.0	13.0	(111.50)	39-5
2	N-3	釘	1層	(34.0)	6.5	5.7	(36.50)	39-6
3	N-4	釘	1層	(39.0)	12.0	8.1	(94.00)	39-7

No.	遺物番号	種別	層位	実測値 cm	幅 cm	厚さ cm	面積(cm ²)	写真記録
-----	------	----	----	--------	------	-------	----------------------	------

No.	遺物番号	種別	層位	実測値 cm	幅 cm	厚さ cm	面積(cm ²)	写真記録
-----	------	----	----	--------	------	-------	----------------------	------

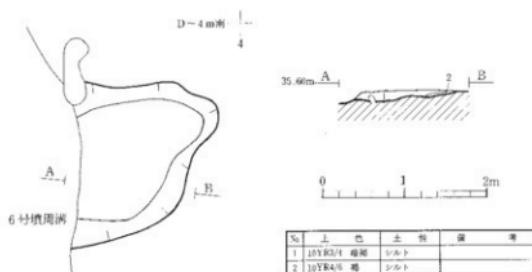
第24図 SK-36 土坑・出土遺物

が、南側に向かって若干の傾斜がみられる。遺構検出面よりやや下がった埋土中で、壁面に沿うように釘と思われる鉄製品5点が出土している。このうち4点を図示した。

SK-37 土坑 (第25図)

調査区中央部D-3区に位置し、基本層第4層上面で確認された。6号墳周溝と重複関係にあり、周溝に切られていることから、本遺構が6号墳よりも古い。また、一部擾乱を受けている。6号墳の周溝に切られていることから、全体の平面形、規模は不明であるが、不整形で、2.01m×1.71m以上である。堆積土は2層に分けられる。深さ

は10cmで、壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦であるが南側へ緩やかに傾斜している。中央東寄りの底面から土師器片が出土している。図示したものは土師器壊1点のみである。成形の際にロクロを使用せず、内面に黒色処理を施していないものである。



第25図 SK-37 土坑・出土遺物

SD-3 溝跡（第4図、第26図・写真27）

調査区中央部に位置し、調査区を斜めに横切るよう延びている。基本層第4層上面で確認された。

前回の調査のSD-3 溝跡と同一の溝跡である。前回の調査区では、古墳や土坑との重複関係が認められたが、今回の調査区では他の遺構との重複はない。

擾乱や削平を受けており、特に北部で著しく、一部では削平のため溝が途切れている部分がある。南北方向の溝跡で、途切れた部分も含めると約33mにわたって検出された。幅は67cm、深さは14.5cm、断面形は皿形を呈している。調査区北壁では、溝幅136cmと、広くなっている。地形の傾斜に沿って、緩やかに南側に下っている。溝跡は若干弧状を呈し、方向はおよそ N-12°~20°-W である。出土遺物はなく、前回の調査では、表土直下で検出されていることから、新しい時期の溝であると考えられており、今回の調査でも同様である。

V. まとめ

今回の調査で検出された遺構は古墳の周溝2基、堅穴住居跡3軒、堅穴造構1基、土坑3基、溝跡1条である。前回の調査成果と合わせると古墳10基、堅穴住居跡9軒、堅穴造構1基、土坑37基、溝跡6条である（第27図）。

出土した遺物は埴輪、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、鉄製品などがある。

遺物については、前回の調査と同様に埴輪の出土量が最も多く、その他の遺物は少量である。ここでは、前回の調査の成果に新たに加えるべき事項について述べておきたい。

1. 古 墳

古墳は6号墳、7号墳の2基が検出された。6号墳は本遺跡で検出された古墳のなかでは11号墳に次ぐ規模である。出土した埴輪には胡顔形埴輪と円筒埴輪がある。胡顔形埴輪は円筒部が3段のものであり、3段目に半円形のスカシ孔、2段目に90°ずれた位置に小孔が穿たれているものである。円筒埴輪は3c類、4b類、4c類、5類がある。前回の調査では細別分類はできないが、3類と2か3類、5か6類と考えられる埴輪があるとされている。今回の



第26図 SD-3 土層断面図

調査結果から2か3類とされていたものは3類、5か6類とされていたものは5類であることが考えられる。これらのことから6号墳には五反田古墳系列と富沢窯跡系列の埴輪が伴っていたことが明らかになった。

7号墳は本遺跡で検出された古墳の中で最も小規模のものである。周溝の底面には多くの起伏が見られ、その成因として周溝掘削の作業単位を表している可能性がある。前回の調査では5類の円筒埴輪のみが確認されていたが今回の調査では朝顔形埴輪と円筒埴輪が出土している。朝顔形埴輪は破片のみで詳細は不明である。円筒埴輪は5類と6類がある。これらは富沢窯跡系列と考えられるものである。

以上のことから6号墳は11号墳とともに五反田古墳系列と富沢古墳系列の両者の埴輪を持つグループに、7号墳は1・2・4・10号墳とともに富沢窯跡系列の埴輪を持つグループにまとめられる。

6号墳、7号墳の縦年的な位置づけは、前回の調査の報告では7号墳は大野田1号墳段階に位置づけ、6号墳は大野田1号墳段階の可能性を指摘していた。今回の調査結果から6号墳と7号墳の出土埴輪を比較すると、朝顔形埴輪の肩部の形態や調整、円筒埴輪の口縁部形態や凸帯の高さ、基部の厚さなどに違いがあり、6号墳が7号墳よりやや古い様相が見られる。のことから6号墳は前回の報告よりやや古く大野田2号墳段階に近い段階に位置づけられ、7号墳は前回の報告通り大野田1号墳段階に位置づけられる。

2. 竪穴住居跡・竪穴造構

竪穴住居跡はSI-8～10まで3軒検出した。SI-8と10は重複しているが、SI-8が新しい。SI-8から高杯が出土しており前回の調査のSI-1・2・3・6と同様に塙釜式期と思われる。SI-10は土師器器や弥生土器片が出土しているが時期が判るものはみられず、塙釜式以前としかいえない。SI-9は住居跡にカマドが付設され、出土した土師器は成形に際してロクロを使用していないもので、坏の内面に黒色処理が施され、外面上には段が観察されるものがある。これらは国分寺下層式期のものであると思われる。

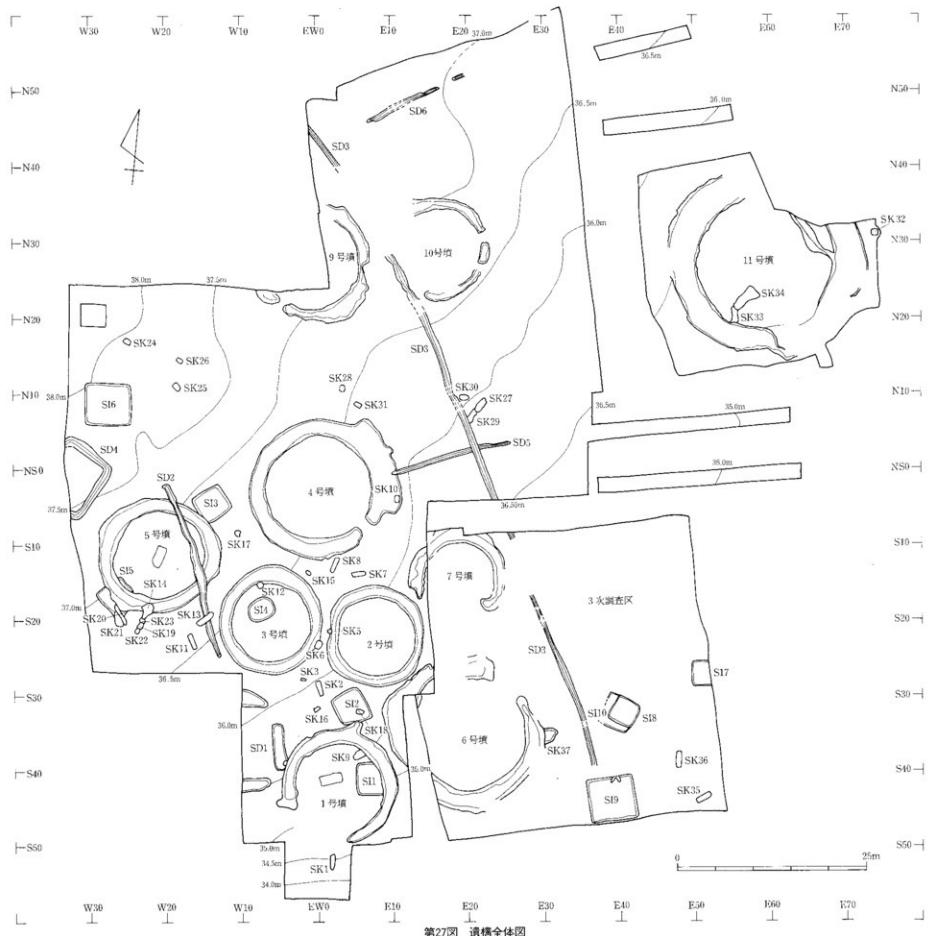
竪穴造構はSI-7の1基である。出土した土器は成形に際してロクロを使用していない土師器で、内面に黒色処理が施され、平底である。国分寺下層式期のものであると思われる。

3. 土 墓

3基検出された。SK-35・36はその形態が前回の調査で土壤墓とされたものに類似しており、鉄製刀子や鉄釘が出土していることから土壤墓と考えられる。またSK-36は鉄釘が出土していることから木棺墓であった可能性がある。前回の調査同様平安時代のものと思われる。またSK-37は6号墳周溝と重複しており、それに切られていることから6号墳より古いものである。

引用・参考文献

- 氏家和典 1957：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
藤沢 敦 1992：「円筒埴輪 東北」『古墳時代の研究9 古墳III 墓輪』雄山閣
結城真一・藤沢敦：1987 「大野田古墳群 春日社古墳・島原原古墳 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集 仙台市教育委員会
平間亮輔 1998：「原遺跡－第1・2次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第229集 仙台市教育委員会



第27図 遺構全体図

写 真 図 版



写真1 遺跡周辺航空写真（1961）



写真2 調査区全景（東→）



写真3 調査区北壁土層断面（南→）



写真4 6号填完掘状況（東→）



写真5 6号填確認状況（東→）



写真6 6号填西側土層断面（東→）



写真7 6号填出土状況（南東→）



写真8 6号填南東部出土状況（南西→）



写真9 7号墳埴輪状況（東→）



写真10 7号墳埴輪状況（南→）



写真11 7号墳北東部埴輪出土状況（南東→）

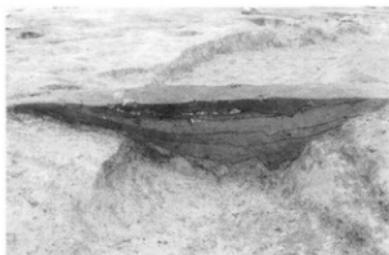


写真12 7号墳周溝土層断面②（西→）



写真13 7号墳周溝土層断面④（南→）



写真14 SI-7 土層断面（南→）



写真15 SI-8・10完掘状況（南→）



写真16 SI-8 炭化物・焼土検出状況（東→）

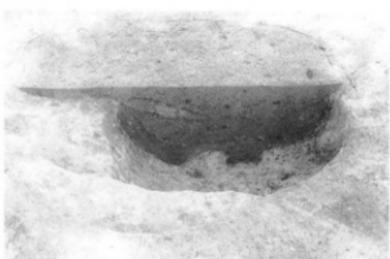


写真17 SI-10貯蔵穴土層断面（西→）



写真18 SI-9 完掘状況（南→）



写真19 SI-9 カマド全景（南→）



写真20 SI-9 貯蔵穴（新）土層断面

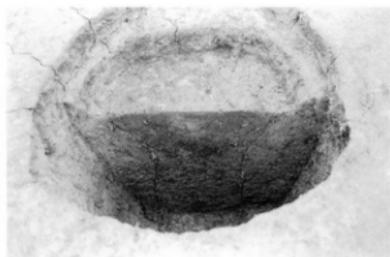


写真21 SI-9 P4 土層断面（南→）



写真22 SI-9 床面土器出土状況（南→）

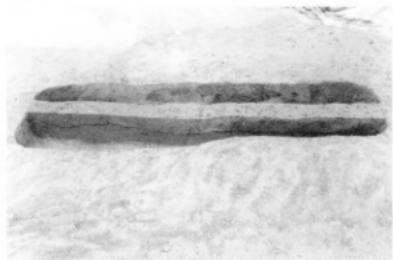


写真23 SK - 35土層断面（北→）

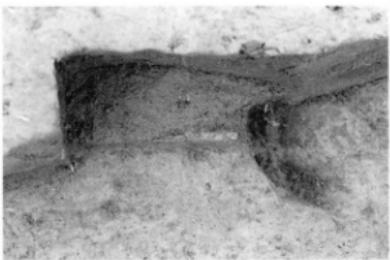


写真24 SK - 35刀子出土状況（南→）

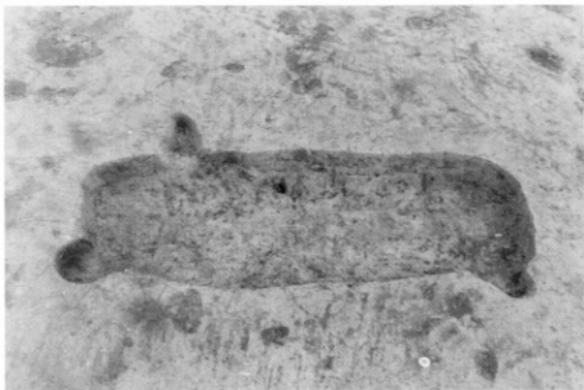


写真25 SK - 36完掘状況（西→）

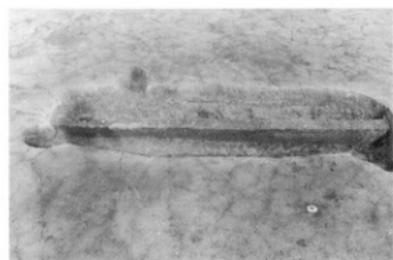


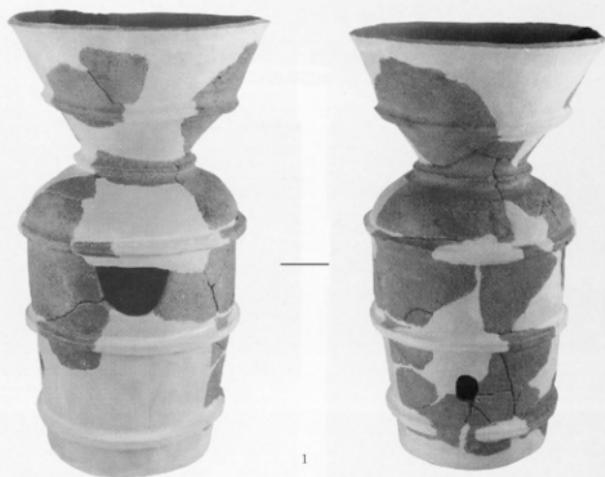
写真26 SK - 36土層断面（西→）



写真27 SD - 3 完掘状況（南→）



写真28 6号墳出土遺物(1)



1

写真29 6号墳出土遺物(2)

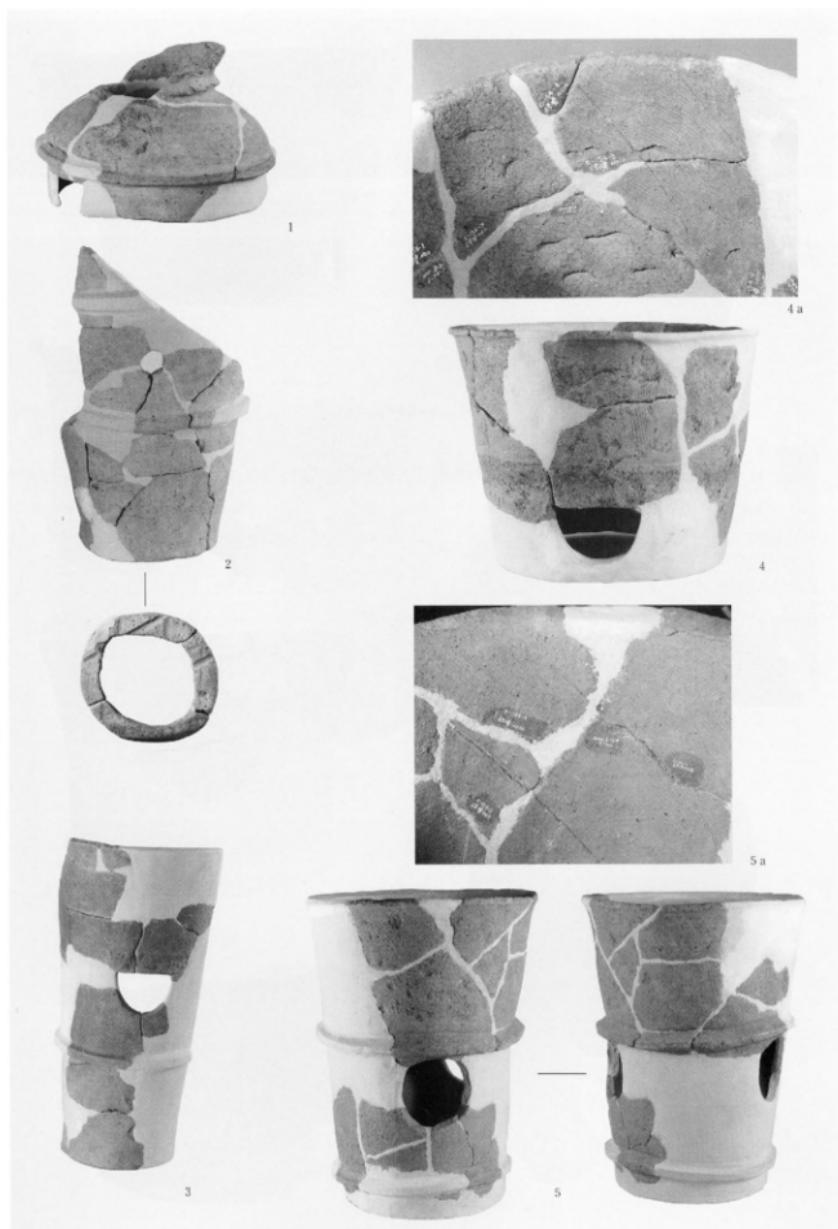
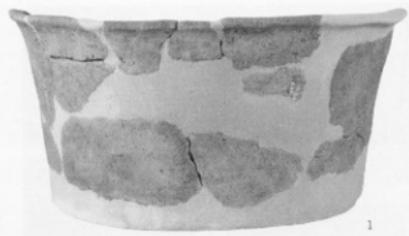


写真30 6号墳出土遺物(3)



写真31 6号墳出土遺物(4)



1



2



3



4



5



6

写真32 6号填出土遺物(5)



写真33 7号墳出土遺物(1)

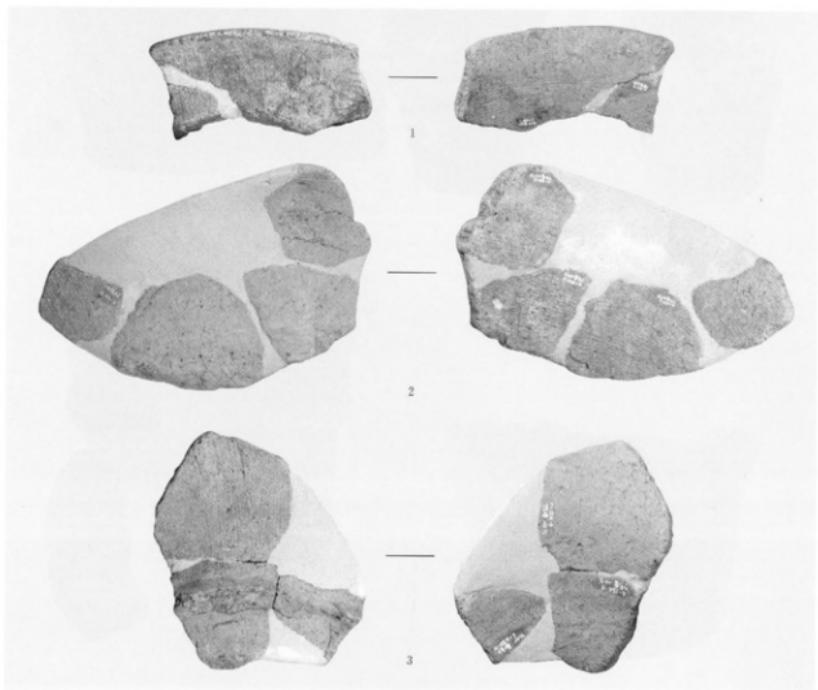
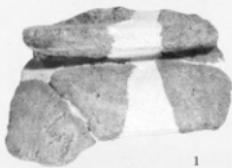


写真34 7号墳出土遺物(2)



1



2



3



3a



4



4a

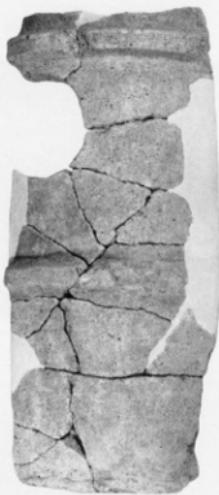
写真35 7号填出土遺物(3)



1



2



3



4



5



6



7

写真36 7号墳出土遺物(4), SI-8出土遺物



写真37 SI-9出土遺物(1)

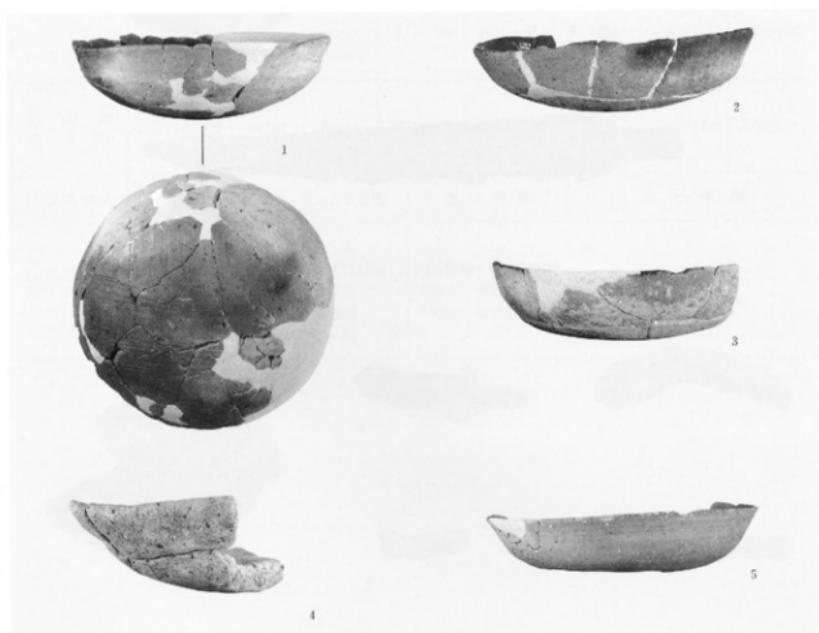


写真38 SI-9出土遺物(2)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

写真39 SI-9出土遺物(3)。SK-35・36・37出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき							
書名	原遺跡							
副書名	第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第240集							
編著者名	主浜光朗							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	1999年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
原遺跡 第3次	宮城県仙台市 太白区西多賀 三丁目	市町村 04100	遺跡番号 01083	38°13'10"	140°51'38"	19980731 ~19981007	1200m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
原遺跡	古墳群 集落跡	古墳 奈良 平安	円墳 竪穴住居跡 土坑 土壤基 溝跡	円筒埴輪・朝顔形埴輪 土師器・須恵器・瓦 土製品・鉄製品				

仙台市文化財調査報告書第240集

はら
原 遺 跡

—第3次発掘調査報告書—

1999年12月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区鏡町三丁目7-1
文化財課 022(214)8893・8894

印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24
TEL 263-1166
